

刺青・高野聖・変身

目次

刺青

- 概略（あらすじ）
一、 その後の展開

高野聖^{ひじり}

- 概略（あらすじ）
一、 煩惱（欲望と感情）
二、 人間の二大欲
三、 結び

変身（カフカ）

- 一、 家族の目
二、 他人の目
三、 あるがままの人間
四、 変身（表面的現象）
五、 カフカの「変身」
六、 対応の仕方

※ 参考文献

刺青

「刺青」について

例えば、谷崎潤一郎に『刺青』という有名な作品があるが、それは、次のような内容になるかと思う。つまり、「……当時の芝居でも草双紙でも、すべて美しい者は強者であり、醜い者は弱者であった。誰も彼も挙つて美しからむと努めた揚句は、天稟の体へ絵の具を注ぎ込むまでになつた……」ということである。

さて、清吉という若い刺青師の腕利きがあつた。彼は、奇警な構図と妖艶な線とで名を知られ、そして、彼の心を惹きつける程の皮膚と骨組みとを持ち、また、一切の構図と費用とを彼の望むがままとして、その上、堪え難い針先の苦痛を、一つ月も二つ月も堪え得るような人でなければ刺らなかつた。この若い刺青師の心には、人知らぬ「快樂と宿願」とが潜んでいた。その「快樂」とは、大抵の男は、苦しき呻き声を発するが、その呻き声が激しければ激しい程、彼は不思議に云い難き愉快を感じるのであつた。そして、刺青のうちでも殊に痛いと言われる朱彫、ぼかしぼり、それを用うる事を彼は殊更喜んだ。

彼の年来の宿願は、光輝ある美女の肌を得て、それへ己れの魂を刺り込むことであつた。素質と容貌とに就いては、いろいろな注文があつた。昔に美しい顔、美しい肌とのみでは、中々満足する事が出来なかつた、彼の気分に適つた味わいと調子の女性は容易に見つからなかつた。まだ見ぬ人の姿かたちを心に描いて、三年四年は空しく過ぎようとしていた。

丁度四年目の夏のとある夕べ、深川の料理屋の前を通りかかつた時、彼はふと門口に待っている駕籠の簾のかけから、真つ白な女の素足のこぼれているのに気づいた。その女の足は、彼にとっては尊き肉の宝玉であつた。拇指から起つて小指に終る繊細な指の整い方、この足こそは、男の生血で肥え太り、男のむくろを踏みつける足であつた。この足を持つ女こそは、彼が永年たずねあぐんだ、女の中の女であるうと思つた……。

さて、ここまでの「内容」は、清吉という若い刺青師の腕利きがいたが、その彼の「年来の宿願」というのは、光輝ある美女の肌を得て、それへ己れの魂を刺り込むことであつた。しかも、その女性は、男性に従順に傳くような女性ではなく、むしろ男の生血で肥え太り、男のむくろを踏みつけるような、女の中の女を探し求めていたということである。それでは、なぜ、彼は、そのような女性を捜し求めていたのかと問えば、それは、光輝ある美女の肌を得て、その光輝ある美女の肌に刺り込みたいと願つた「絵柄」こそは、まさに「女郎蜘蛛」であつたからである。つまり、彼が描きたいと願つていた「女郎蜘蛛」というのは、まさに「……男を肥料として肥え太り、男を踏み台にしてのし上がっていく、まさに女の中の女」でなければならなかつたからである。それゆえ、そのような天性の「性分」（生まれつき）の女性を探し求めていたということである。

つまり、そもそも彼は、なぜ「女郎蜘蛛」を刺り込もうと思つたのか？ それは、まず、女の中の女とは、一体、どういう女だろうかと考えた時に、まず、男に踏みじられる、そのような弱い女ではなく、むしろ強い女、しかも、ただ強いだけではなく、むしろ男を肥料として肥え太り、男を踏み台にしてのし上がっていく女、それが、まさに「女の中の女」であり、それを動物に喩えて言えば、それこそ、まさに「女郎蜘蛛」に他ならないということである。つまり、「女郎蜘蛛」というのは、まさに「女の中の女」の象徴である。

*

*

さて、五年目の春も半ばの頃、彼の馴染みの使いでやってきた十六、七の娘が、実はこ

の前の女性であると知ると、彼は、座敷に招き入れて、彼女に二つの「巻物の絵」を見せることになる。一枚は、暴君紂王の寵妃、末喜を描いた絵であり、もう一枚は、若い女性が桜の樹に身を倚せて、足下に累々と斃れている多くの男たちの屍骸を見つめている絵であった。それでは、なぜそのような絵を見せようとしたのか？ それは、彼女の「心の反応」を見るためである。つまり、その女性の持つて生まれた天性の「性分」がどういふものであるかの確認を得るためである。そして、「……この絵にはお前の心が映っているぞ」、「……どうしてこんな恐ろしいものを、私にお見せになるのです」、「……この絵の女はお前なのだ。この女の血がお前の体に交っている筈だ」、「……これはお前の未来を絵に現わしたのだ。此処に斃れている人たちは、皆これからお前の為に命を捨てるのだ」、「……後生だから、その絵をしまつて下さい」と云いながらも、やがて、「……親方、白状します。私はお前さんの察しの通り、その絵の女のような性分を持つていますのさ」と。そこで、彼（清吉）は、懐に隠し持っていた麻睡剤の壺を取り出して、それを使って彼女を眠らせることにするのであった。……

そして、彼女が眠っている間に、彼は、朝から翌日の朝までかけて、彼女の背中に「女郎蜘蛛」を刺り進め、清吉は、その朝、暫く絵筆を擱いて、娘の背に刺り込まれた蜘蛛のかたちを眺めていた。——その「刺青」こそ、まさに「彼が生命のすべて」であった。その仕事をなし終えた後の心は空虚であった。そして、最後の仕上げとして「湯殿」に入つて色上げをすれば、それで完成と成るものであった。そして、「……己は、お前をほんとうの美しい女にするために、刺青の中へ己の魂をうち込んだのだ。もう今から日本国内に、お前に優る女は居ない。お前はもう今までのような臆病な心は持つてはいないのだ。男と云う男は、みなお前の肥料になるのだ……」と。つまり、この若き刺青師も、所詮は「最初の肥料」に過ぎなかったということである。それゆえ、ここからこそ、彼女の「第二の人生」が始まるうとしている。ところが、作者は、ここで敢えて筆を止めてしまったのである。あとは、この「女性」がこれからどういう人生を辿るかは、むしろ「読者にゆだねた」ということになるのだろう。

一、その後の展開

そこで、敢えてこの女性の「第二の人生」がどうなったかをあれこれ妄想してみると、彼女は、いわば「美しい女性」であるので、やがて「女主人公」（ヒロイン）となつて輝き出すことは間違いないが、その場合、次のような「二つの展開」が考えられるかと思う。その一つは、作者が意図したように、文字通り、いわゆる「女郎」（つまり「女郎蜘蛛」となつてのし上がつていくという「考え方」であり、この「考え方」であれば、誰もが容易に想像できるものであり、敢えてその先の展開を描く必要はないということになるのだろう。そして、もう一つの「考え方」としては、彼女は、「悪女」にはなりきれなかったという展開である。それは、清吉の予想に反して、彼女は、「善き魂」を宿していたので、どうしても「悪女」にはなりきれなかったという展開である。そこで、彼女は、やがて、新たな「女主人公」（ヒロイン）となつて輝き出すのである。それは、「女主人公」（ヒロイン）であるので、「悪人」ではないが、また、「善人」そのものでもなく、むしろ「悪と善」との葛藤に悩み苦しみながらも、その時と場所とに応じて、様々な「姿」を魅せる

という展開である。それゆえ、彼女は、自ら手を下すようなことはしないが、彼女の何とも抗しがたい「魔力」に魅せられて、男の方から自ら滅んでしまうのである。特に、彼女の「背中の刺青」を見てしまった人は、男女問わず、その魔性の美に「魂」を奪われてしまい、もう身動きできなくなるとともに、彼女の言には逆らい難いものを感じて、いわば彼女の「魔力の虜」と化していくのである。そして、彼女は、次から次へと、その時々を目的を達成していくことになる。そして、最終的には、女性たちの上に立つことになるが、それは、女性たちのまさに「救世主」となっていくということであり、様々な「場面や状況」のなかで、男たちに踏みにじられている女性たちの「救世主」となって行くのである。それは、何の罪もない女性たちが男たちに無残に残虐に踏みにじられる姿を見ると、彼女の「血が抗しがたく騒ぐ」からであり、もちろん、人を殺すような方法（手段）ではなく、むしろ男の方が彼女の何とも抗しがたい「魔力」に魅せられて、自ら滅んでいくのであり、それは、相手に応じて、金なら金で、色なら色で、酒なら酒で、賭けなら賭けで、地位なら地位で、知力なら知力で、その他の何らかで仕掛けていくのである。それでは、なぜ、彼女は、いわゆる女性たちの「救世主」となっていくのだろうか？ それは、まさに「女の中の女」だからである。つまり、彼女は、そういう生まれながらの「運命（宿命）」（女郎蜘蛛）を、つまり、「悪男狩り」を背負ってこの世に生まれて来ているということである。そして、彼女は、やがて伝説となって、長く語り継がれていくという展開になるのである。

*

*

熱き肌あつはだに

宿る女郎蜘蛛やどぐもの

宿命さだめかな

高野聖

「高野聖」について

例えば、泉鏡花の『高野聖』という作品は、非常に有名な作品であるが、その「内容」は、次のようなものである。それは、「……私は、旅の途中、汽車の中で、一人の旅僧に出会った。その旅僧は、聞けばこれから越前へ行って、派は違うが永平寺に尋ねるものがあるとのこと、ただし、敦賀に一泊してからということである。一方、若狭へ帰省する私もおなじ処で泊らねばならないのであるから、其処で同行の約束ができた。旅僧は、高野山に籍を置くものであり、年は、四十五、六で、柔和で、おとなしやかな風采であり、後で聞くと、宗門名譽の説教師で、六明寺の宋朝という大和尚ということであった。そして、二人は、同じ旅籠に泊まることになるが、何よりも最も耐え難いのは晩飯の支度がすむと、忽ち灯りを行灯に換えて、薄暗いところでお休みなさいと命令されるが、私は、夜が更けるまで寐ることができないたちであり、そこで、旅僧は、若い頃に、こういうことがあったという話を私にしてくれることになったということである……」。

そして、その旅僧の「話」というのは、次のようなものであった。つまり、「……山また山という奥深い山を越えて、旅の僧は、名代の天生峠へと向かっていたが、その歩み進む山道では、夏の暑さと草いきれのなか、汗をかきながら、草むらでうごめく様々なへびに出くわしたり、また、雨が降るがごとき数多くの山蛭に全身の血を吸い取られて、痛いか、痒いのか、それとも燦つたいのか得もいわれぬ苦しみに悩まされながらも、やがて、前途に、ヒイイと馬の嘶くのが銜して聞えた。その峠には孤屋（一軒家）があり、そこには、二十二、三歳の白痴の少年と、一人の、小造の美しい、声も清しい、ものやさしい婦人と、もう一人、親仁（下男）が住んでいた。旅僧は、一晚の泊まりをお願いすると、しばらく考えてから、婦人は、「……お泊め申しませう。さぞまあ、お暑うござんしたでしょう」。「……この裏の崖を下りますと、綺麗な流がございますから一層それへ行らっしゃってお流しが宜ゆうございませう。丁度、私も米を研ぎに参ります」といって、少年の面倒は、親仁に預けて、二人で一緒に谷川へと下りていくことになる。

そして、月夜の下、旅僧が身を屈めて、川の水で二の腕を洗っていると、婦人は、「……すっぱり裸体になってお洗いなさいまし、私が流して上げましょう」といって、旅僧の着ているものを脱がせ、そして、背中の山蛭の傷を見て驚き、両方の肩から、背中、横腹、臀にさらさら水をかけては、手は綿のように優しくさすってくれる。「……その心地の得もいわれなさで、眠気がさしたでもあるまいが、うとうとする様子で、疵の痛みは遠のき、ひたと附ついている婦人の身体で、私は花びらの中に包まれたような工合。その不思議な、結構な薫のする、暖い花の中へ柔かに包まれて、足、腰、手、肩、頸から次第に天窓まで一面に被さったから吃驚、石に尻餅を搗いて、足を水の中に投げ出して落ちたかと思う途端に、女の手が背後から肩越しに胸をおさえたのでそれに確りつかまった」。そして、婦人は、「……私は、飛んだ暑がりなんでございますからと、何時の間にか衣服を脱いで全身を練絹のように露して、今どきは、毎日二度も三度も来てはこうして汗を流します」と云う。そうすると、いろいろな所から様々な動物たちが集まって来るのであった……。

さて、二人は、再び、孤屋（一軒家）に戻り、親仁は、旅僧が「人間の姿」のまま戻つて来たことに驚くが、厩から一頭の馬（実は富山の薬売り）を門前に引き出して、これから諏訪の湖の辺まで馬市へ出すということであり、いやがる馬を婦人がなだめて、山

路をしゃん、しゃんと下りていった。その後、三人（白痴と婦人と旅僧）で夕食を食べた後、床につくことになるが、そうすると、家のまわりを実に様々な動物たちが取り巻くような気配に満ちて、戸の外のものゝ気配は動揺を造るが如く、ぐらぐらと家が揺いだ。旅僧は、一心不乱に念仏を唱え、夫婦が聞もひっそりとした、とある。……

翌朝、正午頃、里の近く、滝のある処で、昨日馬を売りに行った親仁の帰りに出逢う。旅僧は、「……丁度私が修行に出るのを止して孤家に引返して、婦人と一所に生涯を送ろうと思つていた処」であり、それは、昨夜、婦人から、世の中へ苦勞をしに出るよりも、ここに私の傍においでなさいと云われたことと、また、婦人が不便でならない。深山の孤家に白痴の伽（夫婦として暮らして世話）をしながらも言葉も通ぜず、言葉すら忘れそうになっている。せめて傍につき添って、朝夕の話相手となり、山で木の実を拾って、料理の手伝いをしたり、また、障子の外と内で、話をしたり、笑ったり、そして、谷川で二人して、その時に婦人が裸体になって私が背中へ息が通つて、微妙な薫の花びらに暖に包まれたら、そのまま命が失せても可い、と思つていた。しかし、親仁に諭されて、旅僧は、人間の姿のまま山を下りていくことになるのである。それは、なぜか？ 旅僧は、彼女に心を奪われたが、しかし、それは、いわゆる「性欲」そのものからではなく、つまり、セックスそれ自体は、むしろ「拒絶」（つまり「避けている」）のであり、むしろ彼女を不便と思つて、傍につき添つていたからであり、もし、「性欲」そのものからであれば、その旅僧も、そこに留まり、やがては何らかの動物に変えられていたということである。それでは、この婦人は、一体、何者かと問えば、もともとは、医者娘であり、そこにやってくる患者に優しく話しかけたり、また、体にふれたりすると、不思議と患者の痛みがやわらいだりして、それが評判になり、数多くの患者がやってくるようになる。その中に、親と一緒にやってきた一人の子供は、脚に難渋な腫物があり、手術をしたが、なかなか治らずに、親は医者にその子を預けて、子供はそのままそこに留まることになるが、それが白痴の少年なのである。そして、峠にはもともと二十軒ぐらゐの家並みがあったが、十三年前、大洪水でほとんど流されて多くの人たちも犠牲になり、残ったのは、三人と一軒家だけであつたとともに、婦人は、ますます不思議な力（神通力）のようなものを身につけて、峠で迷つた旅人を誘惑しては、飽きると様々な動物に変えていたのである。

一、煩惱（欲望と感情）

さて、この「山越え」を宗教の「修行」での諸段階というように仮に考えた場合、例えば、われわれ人間の「頭の中」（或いは「心の中」）には実に様々な「欲望や感情」などが絶えず現われたり消えたりしている状態であるが、その様々な「欲望」としては、例えば、食欲、性欲、物欲、金銭欲、所有欲、支配欲、独占欲、出世（社会的地位）欲、名誉欲、名声欲、その他、また、様々な「感情」としては、例えば、快・不快、怒り、恐れ、嫌悪、嫉妬、驚き、喜怒哀楽、愛情、苦しみ、恨み、憎しみ、憎悪、怨念、その他、実に様々な「欲望や感情」などがあるかと思う。そして、宗教の「修行」としては、それらの実に様々な「欲望や感情」などから開放されて、いわゆる「心の空（無）」を「獲得（体得）」することが、いわば一つの「到達点」になるかと思うが、われわれ人間の実に様々な「欲望や感情」（つまり「煩惱」）の中でも、何とも越え難いものとしては、まさに「二大本能」

としての「食欲と性欲」とがあり、その中でも「性欲」の山（峠）を乗り越えられなければ、いわゆる「心の空（無）」を真に「獲得（体得）」することは、できない。

例えば、釈迦においても、有名な菩提樹の下での最終段階の「瞑想」のなかで、いわゆる「三人の妖女」（それは「愛執と嫌悪と貪欲」）の誘惑を受けている。それだけわれわれ人間にとって「家族や女性への執着」や様々な「貪欲」（特に「食欲」や「金銭欲」その他）というものは、何とも越え難きものがあるということである。そして、『高野聖』の物語の中でも、最初は、実に様々な「へびや山蛭」（いわば「困難や苦難」）などに悩まされながらも、それらは、何とか越えられたとしても、しかし、最後の最後の段階における、何とも抗し難い「魅惑的な女性」（その「肉体」への執着）と甘い「誘惑」（「性欲」）をも退けて、今まで誰一人として「人間の姿」で、この「山」（峠）を越えられたものはなく、すべて何らかの「動物の姿」（例えば、馬、牛、猿、鼯蛙、蝙蝠、その他）などに変えられてしまったということである。

二、人間の二大欲

さて、「食欲」と「性欲」とは、われわれ人間の「二大本能」であり、しかも、「本能」というのは、まさに「一つの例外」もないということである。つまり、「食欲」のない人、また、「性欲」のない人というのは、ふつうであれば、この世の中に一人も存在しないということである。もちろん、「食欲」については、敢えてここで説明をするまでもなく、「食欲」が完全に消えるということは、すなわち、やがては「餓死」ということ以外何も意味しない。そして、「性欲」というのは、例えば、異性の存在が何とも抗しがたく魅力的に見えたりするのも、すべて「性欲」（つまり「本能」）の働きであり、逆に言えば、われわれ人間の「性欲」が限りなく「ゼロ」に近づいた時、——それは、例えば、男性の場合であれば、自分の中に溜まっていたものをすべて「射精」という形で出しきった状態の時には、この時、「性欲」というものは、限りなく「ゼロ」に近い状態となり、この限りなく「性欲」が「ゼロ」に近い状態にある時には、目の前にどれほど悩ましい「全裸の女性」がいたとしても、それは、何の魅力も「一かけら」も感じられない、まさにただの「肉のかたまり」に過ぎない存在になってしまうのである。——つまり、一気に「性欲」（その「熱病にうなされていたような状態」）は消え失せて、それは、「本能」（性欲）に全面的に支配されていた状態から、急転直下、まさに「知性や理性その他」などに支配されている「通常の状態」へと素早く戻ってしまうということである。

それでは、なぜ そのような「仕組み」になっているのかと問えば、それは、本来、動物にとつて「交尾」をしている状態というのは、まさに「無防備」そのものの状態であり、それは、まさに身を危険にさらしている状態である。つまり、襲いかかる敵は、常に身のまわりに数多く存在しているのであり、それゆえ、動物にとつて長い「交尾」というのは、まさに「命取り」になりかねない行為であり、それゆえ、どのような動物でも、基本的には、「交尾」は短時間で行なわれるのがふつうである。それでは、なぜ、われわれ人間だけ、より長い「交尾」（つまり「セックス」）を望むのだろうか？ それは、まず、長い「セックス」をしていても、基本的には、まさに「身の安全」が確保されているからであり、逆に、「身の安全」が保証されていない場合は、おちおち長い「セックス」などしていら

れないということである。それに加えて、われわれ人間だけが、いわゆる「セックス」それ自体をできるだけ楽しもうとしているかと思う。

三、結び

それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、次のようなことである。つまり、動物たちにとっての「交尾」というのは、本来、まさに「子孫保存欲」から生じているものであるが、人間だけが、恐らく、その「子孫保存欲」だけではなく、いわゆる「セックス」それ自体をできるだけ楽しもうとしているかと思う。それは、一体、なぜなのか？ それは、いわゆる「動物の段階」から、まさに「人間の段階」へと「進化（変化）」することによって、初めて、いわゆる「知性や理性」などが生じて来ることになるが、その「知性や理性」などの働きによってこそ、いわゆる「本能」だけから生じる「交尾」（それは「子孫保存欲」）から、まさに「本能（性欲）＋知性（知力）」の働きによって、初めて、いわゆる「セックス」をいろいろと楽しもうという意識が生じて来たということである。それは、何も「セックス」だけに限ったことではなく、もちろん、「食欲」にしても、いわゆる「本能（食欲）＋知性（知力）」の働きによってこそ、ただ単に目の前の「食べ物」をそのまま黙って食べるというのではなく、むしろ実に多彩と「調理」をして、まさに「より食べやすく、また、より美味しい料理」にして食べているということである。むしろ、それは、「食欲」や「性欲」だけの問題ではなく、もっと広い意味においては、いわゆる「知性や理性」（つまり「知的部分」）の著しい発達によってこそ、われわれ人間というのは、今日のようなかなり高度な「文化や文明」などを築き上げて来たということである。

*

*

この峠

越すに越されぬ

女体坂

変身

「変身」について

例えば、『変身』というカフカの有名な作品があるが、それは、ある日の朝、目覚めてみたら、自分の「姿」が大きな毒虫に変身していたという話である。もちろん、そのようなことは、現実には起こりようのないことではあるが、しかし、自分の「姿・形」^{すがたかたち}がある日、突然、いわゆる「変身」するというようなことは、現実にはいくらでもあり得ることである。それは、いったいどういうことかと言えば、それは、次のようなことである。

例えば、ある日、交通事故に遭ったとする。しかも、それは、極めて深刻な交通事故であり、それゆえ、交通事故に遭った瞬間から、その人の意識は、まさに意識不明状態になってしまったとともに、生死にも直接かわるような極めて深刻な傷を負ってしまったとする。その場合、通常、誰かの通報によって救急車が呼ばれ、その救急車に乗せられ病院に運ばれては、すぐにも「大手術」が何時間もかけて行なわれることになるかと思う。そして、その人が麻酔から覚めて、意識が戻った時には、その人は、まさにベットの上で寝ているような状態になるわけである。そして、自分が交通事故に遭ったことを想い出している、それでは、自分の体は、いったいどうなったのが気になり始め、そこで、どうなったのかを尋ねた時に、家族の誰かから、実は、これこれこういう事情で、一方の脚を切断しなければならなかったことや、実は、脊髄が損傷していて、歩けないので、これからは、車いす生活をしなければならぬと告げられたとする。それは、その人にとっては、極めて「大きなショック」であり、それゆえ、最初は、うそだろうという感じで、到底受け入れ難い気持ちにもなるかと思う。

それは、カフカの『変身』という作品の、ある日の朝、目覚めてみたら、自分の「姿」が大きな毒虫に変身していたという話と、どこか共通するところがあり、それは、自分の「体」が、突然、良い方向ではなく、むしろ悪い方向へと「変身」してしまったということである。しかも、ここで最も大事なことは、例えば、化粧（メイク）や服装（ファッション）、その他などで自分をイメージチェンジして変えるのも、確かに「変身」ではあるが、しかし、そのような「変身」は、いつでも「元の状態」に戻れる変身であり、一方の、カフカの「変身」のように、二度と元に戻れない「変身」とは、根本的に違うものである。それに加えて、その人の「心」が「変心（変わった）」わけではなく、むしろその人の「体」が、「変身（変わった）」しまったということである。そして、その人の「体」が、悪い方向へと「変身」することによって、家族はともあれ、他人のその人を見る目も、大きく変化しやすいくということである。つまり、自分の「心」そのものは、何も変わっていないくても、自分の「体」（つまり「姿・形」^{すがたかたち}）が、悪い方向へと「変身（変わった）」しまっただけで、他人の自分を見る目が、大きく変化しやすいくということである。

一、家族の目

まず、家族の問題から考えてみたいと思うが、家族にしてみれば、命が助かったということ、よかった、よかったということになるかと思う。もちろん、その気持ちにうそはないだろう。そして、入院生活も終わり、家に戻ってきて、今までと同じような生活を始めることになるかと思うが、しかし、今までと何から何まですべて同じということにはな

らないだろう。それでは、いったい何がどう変わるといえるだろうか？ それは、まず、本人自身の気持ちの「変化」が生じ、そして、もう一つは、家族の気持ちの「変化」も生じて来るということである。そして、本人自身の気持ちの「変化」としては、当然のことながら、最初の頃は、どうしても事実を事実として受け入れ難く、それゆえ、荒れた気持ちにもなり、時には、家族にやつ当たりをしてみたりとか、また、時には、自分の部屋に閉じ籠もって絶望的な気持ちになったりするかと思うが、しかし、やがては事実は事実として受け入れざるを得ず、その結果として、前向きに生きていくことを考えるようになるということである。

一方、家族としては、そのように心を悩ましている姿を見ることは、非常につらいことであるとともに、できるだけ今まで通り自然体でサポートしていきたく思うわけである。もちろん、それは、その時だけのことではなく、何年も何十年にも渡って、楽しい時もあるし、辛い時もあるかも知れないが、とにかく継続して行なうようになっていくということである。それは、祖父母を初めとして、家族の誰であれ、また、病氣、介護、身体障害、その他、どのような場合でも、基本的には、すべて同じことになるかと思う。つまり、家族の場合には、その人の「姿・形」がどのように変化していこうとも、そういうこととはあまり関係なく、それ以前とそれほど大きく変わることもなく、最後まで一緒に生きる（或いは面倒を見る）というような気持ちを持ち続けることになるかと思う。

二、他人の目

さて、問題は、他人の「自分を見る目」であるが、他人の「自分を見る目」というのは、自分の「姿・形」の変化とともに、他人の「自分を見る目」も変化しやすいということである。それは、いったい何を意味しているのかと言え、それは、次のようなことである。――つまり、われわれ人間というのは、どうしてもその人の「表面的な現象」（つまりその人の表面的な「姿・形」やその人の表面的な「言動」）などを見聞きしては、この人は、こういう人、あの人は、ああいう人と、勝手に決めて見ているところがあるということである。それでは、なぜそのような見方をするのだろうか。それは、他人の「表面的な現象」（つまりその人の表面的な「姿・形」やその人の表面的な「言動」）などは、われわれの五感（つまり見たり聞いたりすること）を通して、それなりにはつきりととらえることができやすいからであり、一方、他人の「頭の中」（或いは「心の中」）が、いったいどういふふうになっているかなどは、誰にも分かりようがないからである。

つまり、われわれ人間の「頭の中」（或いは「心の中」）には、その人の「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」）などが深く眠っているとともに、その「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」）などから、自ずとその人なりの「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などが自然と生み出されては、その人というものをまさに形成（形づくって）いるということである。一方、われわれ人間というのは、他人の「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」）などのすべてを知りようもないので、その一人一人の他人の「頭の中」（或いは「心の中」）が、いったいどういふふうになっているかなどは、誰にも分かりようがない、まさに「ブラックボックス」状態であり、そ

れゆえ、その人が、何を思い、何を考えているかなどは、厳密にはなにひとつ分からないということである。

ところが、われわれ人間というのは、その人の「表面的な現象」（つまりその人の表面的な「姿・形」やその人の表面的な「言動」）などを見聞きしては、この人は、こういう人、あの人は、ああいう人と、勝手に決めてかかっているところがあるということである。そして、そのような傾向がはつきりとあるからこそ、われわれ人間というのは、どうしても「外的事実」というものを、より重視するようになるとともに、結局は、それによって、自分というものを少しでもよく見せようとするにもなるわけだ。それでは、いわゆる「外的事実」とは、具体的には、いったいどういうものになるのかと問えば、それは、次のようなものになるということである。

つまり、「外的事実」というのは、その人の「身体的特徴」（容姿・容貌）などをはじめ、外に現われる様々な言動、例えば、仕事、生活、趣味、娯楽、遊び、その他等で、その時々表れる、その人の「顔の表情、しぐさ、言葉や行動、その他」、それらに加えて、その人の「生い立ち、年齢、学歴、職歴、生活状況、時代的背景、その他」等である。

一方、「内的事実」というのは、われわれ人間の「頭の中」（或いは「心の中」）に生じて来る様々な「思いや考えあるいは欲望や感情」などであるが、それを大きく三つに分けてみると、一つは、「表面的部分」として、その時々生じる様々な「思いや考えあるいは欲望や感情、その他」などがあり、一つは、「中間的部分」として、永続して持ち続けている様々な「思いや考えあるいは欲望や感情」などがあり、そして、もう一つは、「深層的部分」として、今日まで生きてきたその「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」などの膨大な量の蓄積（蓄え）と遺伝子等があるかと思う。

さて、われわれ人間というのは、どうしてもその人の様々な「外的事実」を見ているのであり、その人の「内的事実」が、いったいどういうものであるかは、よく分からないものである。それゆえ、われわれ人間は、どうしてもその人の様々な「外的事実」を見ては、それをもとにして、その人に関してあれこれ判断し、評価しているということである。

一方、その人自身というのは、逆に、その人の「内的事実」を生きているということである。それゆえ、「外的事実」と「内的事実」との間には、当然のことながら、多かれ少なかれ、ズレがあるということである。

それでは、われわれ人間が、その人をほんとうに理解するためには、いったいどうしたらよいかと言えば、それは、大きな川を「下流から中流、中流から上流、そして、上流から源泉へと溯さかのぼるようにすることである」が、それは、次のようになるかと思う。

まず最初は、その人の外に表れる様々な「外的事実」を、できるだけ厳密に「観察」（分析）することであるが、もちろん、それだけでは、不十分であり、それらを手がかりとして、今度は、その人の「心の中」に深く溶け入っては、自らその人となって、その人の「内的世界」を徹底的に生きてみることによってこそ、その人の「内的世界」の「表面的部分から中間的部分、中間的部分から深層的部分、そして、深層的部分から最も深奥にあるであろう『中心核』そのもの」へと理解を深めていくことである。

そして、その最も深奥にある「中心核」そのものは、まさにその人をその人たらしめている「精神的源泉」であり、その「精神的源泉」からこそ、その人なりの「思いや考え」などが絶えず生じて来るとともに、その人なりの「ものの見方、とらえ方、考え方、

また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」なども形成される、まさに「源泉」そのものになるということである。

三、あるがままの人間

さて、われわれ生身の人間というのは、本来、「良い面も悪い面もその他ありとあらゆる面」を同時に（潜在的に）持ち合わせているものであり、それゆえ、その人の置かれたその時々状況に応じて、その人の「よい面」が現われたり、逆に、「悪い面」が現われたり、或いは、何かわけのわからない面が現われたりすることである、つまり、よい人は、いつも「よい人」であり、そして、悪い人は、いつも「悪い人」というようなことではなく、その人の置かれたその時々状況に応じて、その人の「よい面」が現われたり、また、逆に、その人の「悪い面」が現われたり、あるいは、何かとんでもない面が現われたりすることである。

つまり、あるがままの「生身の人間」というのは、自分でも自分がいつ何を言い出すか、また、何をしでかすかまったく分からないものである。このことは、徹底的に考えてみる必要がある、われわれは、どうしてもあの人は、ああいう人、自分はこういう人間と考えるやすいものであるが、しかし、そういう固定化した存在では決してなく、むしろいつ何を言い出すか、また、何をしでかすかまったく分からない、そういうまさにどろどろとした得体の知れない存在なのである。

例えば、社会的な地位もあり、また、思慮分別もあると思われる人が、何か飛んでもないことをすると、われわれは、一応に驚いたりするが、しかし、その人がどういう職業に就いているからとか、ふだんは、こういう人だからということ、その人間を推し測ることはできないのである。というのも、われわれ生身の人間の「心の中」で蠢いている実に様々な生々しい「欲望や感情」その他などが、そのまま外に現われるのではなく、それらは、その人の「知性や理性」などで自然とコントロールされた形で、外に現われてくるものだからである。

それゆえ、外に現われ出た「言動」だけを見て、あの人は、ああいう人と断定するわけにもいかないのである。——つまり、われわれ生身の人間の「心の中」には実に様々な生々しい「欲望や感情」その他などが、絶えず現われたり、消えたりしている状態であるが、しかし、それらは、その人の「知性や理性」などで自然とコントロールされている状態であり、それゆえ、もしその人の「知性や理性」などのコントロールが弱まった時には、（例えば、酒などを大量に飲んで、その人の「知性や理性」などのコントロールが弱まった時には）、実に様々な生々しい「欲望や感情」その他などが、そのまま外に現われやすくなるということである。

それでは、どちらがほんとうのその人なのか？ つまり、知性や理性などでコントロールされている「社会的自我」の時なのか？ それともコントロールが弱まり、様々な「欲望や感情」その他などに振りまわされている「利己的自我」の時なのか？ 恐らく、それらに自分でも全く自覚できない「無意識の世界」などを加えたものが、まさに「その人」ということになるのだろう。

四、変身（表面的現象）

ところで、自分の「体」が、悪い方向ではなく、むしろ、良い方向へと「変身」するという場合もあるかと思う。例えば、有名な『みにくいアヒルの子』などは、まさにそのような童話であるが、その場合、みにくいアヒルの子は、その「姿・形」が、ほかの子供たちとは違っていたので、いろいろといじめられたりするわけだが、やがて、成長すると、いわゆる「白鳥の姿」へと大変身するという内容になっているかと思う。それは、いったいどういうことかと言え、それをアヒルから人間の場合に置き換えて考えてみると、その人の「心」が「変心（変わった）」わけではなく、その人の「体」が「変身（変わった）」だけであるが、その人の「身体的特徴」（容姿・容貌）などが、良い方向へと「変身（変わった）」だけでも、他人の「その人を見る目」が、大きく変化しやすいということである。つまり、その人の「心」そのものは、何も変わっていないなくても、その人の「体」（つまり「姿・形」）が、良い方向へと「変身（変わった）」だけでも、他人の「その人を見る目」が、大きく変化しやすいということである。

つまり、「体」の「変身」は、その人の「見た目」、つまり、その人の「身体的特徴」（つまり「容姿・容貌」）の「変身」であり、そして、その人の「見た目」の「変身」というのは、われわれの「五感」ではつきりととらえることができ得るものであるのに対して、一方の、その人の「心」の「変心」のほうは、われわれの「五感」ではなかなかとらえにくいものであり、それゆえ、せいぜい「表面的特徴」（その時々を生じる様々な「思いや考えあるいは欲望や感情、その他」などを知る程度であり、もっと奥にある「中間的部分」や「深層的部分」などは、本人が、うそ偽りなく、正直に告白しない限りは、なかなかとらえにくいものになるということである。

つまり、われわれ人間というのは、どうしても「表面的な現象」（つまりその人の表面的な「姿・形」やその人の表面的な「言動」）などを見聞きしては、この人は、こういう人、あの人は、ああいう人と、勝手に決めてかかっているようなところがあるが、しかし、そのような「表面的な現象」（つまり「見た目の感じ」）というのは、いわば「仮相」であり、「実相」そのものであるかどうかはよく分からず、それゆえ、物事の「仮相」ではない、もっと奥にある「実相」そのもの（つまり「真の姿」）をとらえることが、何よりも大事なことになるが、それを実際に行なっているのが、まさに「思惟活動」（つまり「思考（思索）活動」）の一つの「大きな目的」でもなるわけだ。——つまり、言葉を換えれば、われわれ人間の「目」によってとらえられるものは、物事の「表面的な現象」に過ぎず、それは、絶えず変化して止まることのないものであり、それゆえ、まさに「仮相」（つまり「仮の姿」）であるが、その「表面的な現象」のもっと奥にある物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などを厳密にとらえることが、すなわち、「実相」（つまり「真の姿」）をとらえるということであるとともに、それには、当然のことながら、それぞれ「個人差」があり、そして、真に「内的成長（成熟）」した「心の眼」によってこそ、初めて、どこまでも厳密にとらえることができ得るようになるということである。

一方、そうではない人たちというのは、どうしても「表面的な現象」などに意味なく振りまわされてしまい、もっと奥にある、いわゆる物事の「実相」（つまり「真の姿」）をとらえるということは、なかなかできにくいとともに、その「表面的な現象」（つまりそ

の人の表面的な「姿・形」やその人の表面的な「言動」などを見聞きしては、それをそのまま「真の姿」(つまり「真実・真理」)だと思ひ込みやすいということである。

五、カフカの「変身」

ところで、カフカの『変身』という作品は、ある日の朝、目覚めてみたら、自分の「姿」が大きな毒虫に変身していったという「内容」になるが、それは、例えば、今、世界中に蔓延している若者たちの、いわゆる「引きこもり現象」(自分の部屋の中に閉じ籠もって、外に出てこない、或いは外に出られないという「心理的状态」)を、まさに「象徴」的に表現していることにも、あるいはなるのかも知れない。——つまり、今までは何とか「社会」(俗世間)のなかで、活発に生きていた人が、現実の様々な「人間関係」の「あつれき」(摩擦)のなかで、実に様々に「傷つき、疲れ果て」て、次第に「心の活気や活力」などを失い、やがては、学校に行きたくても行けないような「登校拒否」、また、会社に行きたくても行けないような「出社拒否」、或いはまた、「社会」(人混み)のなかに出て行きたくても、出て行けないというような、そういう人間に「変身」してしまうという、まさに「引きこもり現象」(それは自分の「心の中」に閉じ籠もってしまうという現象)を、あるいは「象徴」的に表現していることになるのかも知れない。

もちろん、カフカの「変身」というのは、その人の「姿」が変わるのであり、それゆえ、いわゆる「心」が変わるというのではない。しかし、例えば、「体」が悪い方向へと変化するということは、その人の「心」もそのような方向へと変化しやすく、また、「心」が深く「悩み苦しむ」ようになれば、その人の「体」もそのような方向へと変化しやすくなるということ、それゆえ、われわれ人間の「体」と「心」というのは、決して「別々のもの」ではなく、むしろ、極めて「親密な関係」にあるということである。例えば、「体」が悪化したために、「外」に出られなくなるのと、「心」が悪化したために、「外」に出られなくなるのとでは、もちろん、最初の「動機」は違うとしても、しかし、長い間、独り「部屋」の中に閉じ籠もって、外にはあまり出なくなるような状態が長く続けば、やがては、ほとんど同じような「心理的状态」を生み出すことになるかと思う。それは、いったいどういうものかと問えば、それは、部屋の中にいる間は、その人は、「精神の安定や安心」などが得られているとともに、何か好きなことを行っている時には、その人なりの「満足感や充実感」などを得ることもでき得る。しかし、「外」に出て行くのには、やはり不安がよぎり、人と会うのも、また、人と面と向かって話をするのも不安を感じてしまう。それは、なぜかと問えば、それは、結局、——自分が何らかの意味で「傷つく」ことになるのが不安(嫌)だし、また、他人を何らかの意味で「傷つけてしまう」ことになるのも、そのどちらも「嫌だ」という「心理」にどこか似ているということである。

一方、その人を取りまく「家族関係」というものにも、大きな「問題」が生じることになるが、カフカの「作品」のなかでは、例えば、母親は、息子の姿を見て、いわゆる「失神」をしてしまうが、それは、まさに母親の「失望感」の表れでもあるとともに、父親は、そのような息子に対して、リングの実を投げつけ、それが背中にめり込むことになるが、それは、まさに父親の「怒り」の象徴でもあり、そして、妹は、最初のうちは、兄の面倒をせっせと見ることになるが、それでも、最後には見放してしまう。それは、結局は、ま

さに妹の「諦めの気持ち」の表れでもあるということである。そして、毒虫に「変身」してしまった主人公は、自分の「気持ち」（真意）を家族に正確に伝えることもできず、（それは、虫の状態なので、言葉による「意思疎通」もうまくいかず）、結局は、お互い親しく話し合って「理解し合う」ということもできずに、主人公は、まさに孤独なまま「食事も摂らなくなり、死んでしまう」ということである。

六、対応の仕方

それでは、そのような場合、いったいどうしたらよいのかと問えば、それは、結局、段階を踏まえて「外」に出るしかない。もちろん、「外」に出れば、実に様々なことで「傷つく」ことになるだろうし、また、他人を「傷つけてしまう」こともあるかも知れない。しかし、それが、まさに「生きる」ということだと覚悟を決めて、「外」に出るしかない。そうすれば、自分が「傷つく」こともあるだろうが、また、「楽しい」こともあるかも知れない。また、人との交流をはじめ、様々な「助言や援助」その他などが得られることもあるかも知れない。そのようなところから、自分の「生きる場所」を見つけ出していくということである。——ただ、若い人たちのなかには、例えば、「生活保護」などの受給を受けて、それに甘んじて長々と「ぬるま湯」につかってしまう人も多いかと思うが、その場合、それが短期であれば、それほど問題はないだろうが、それが長期に渡るということであれば、それは、真に自分を「生かす道」ではなく、むしろ、自分を「殺すような道」であり、自分の「可能性」（潜在能力）を自ら放棄してしまうものである。というのも、それは、どのような分野のどのようなことであれ、いわゆる「努力」を積み重ねることによってこそ、初めて、その人の「可能性」（潜在能力）も引き出されて来るものであるとともに、その人の「人生（道）」も、初めて開ける」ものであり、いわゆる「努力」を積み重ねることを怠って、長々と「ぬるま湯」につかっているだけでは、その人の「人生（道）」は、永遠に開けない」ということである。それゆえ、何よりも大事なことは、どのような分野のどのようなことであれ、いわゆる「努力」を何年も積み重ねることであり、そのような「努力」を何年も積み重ねていくうちに、やがては「自分の人生（道）」も、開けることになる」とともに、いわゆる自分が「心の中」に想い描くような、まさに「自分本来の人生」へと近づけていくことも、可能になるということである。

*

*

「参考文献」

- ※底本「刺青」 谷崎潤一郎著（「青空文庫」）
- ※底本「刺青・秘密」 谷崎潤一郎著（「新潮文庫」）
- ※底本「高野聖・眉かくしの霊」 泉鏡花作（「岩波文庫」）
- ※底本「変身、他一篇」 カフカ作・山下肇訳（「岩波文庫」）